

1. 第10回全共の出品対策とその成果から見た 地域畜産振興の現状と課題

玖珠家畜保健衛生所

○(病鑑)河野泰三

【要 約】

第10回全共にあたり、家保は出品対策の強化を図るため、JA他関係機関で構成した指導班の一員として参画。出品対策は指導班で計画・協議を行い、育種組合、人工授精師、獣医師らと連携し、計画交配や巡回と集畜による管理指導等を実施。結果、県代表として管内から種牛の部第4区に4頭、第5区に4頭、第6区に3頭、第7区に4頭、肉牛の部第7区に2頭、第8区に1頭の計18頭を出品。最終比較審査では第5区で優等1席、第4区で優等2席、第7区で優等4席、第6区で優等6席を受賞。成果は出品者の熱意と努力に他ならないが、地域が和牛育種・改良の重要性を認識し積極的に取組んできたこと、関係者一体となった支援体制が構築されたことが大きく貢献。畜産情勢は厳しさを増し指導班員業務も煩雑多様化する中、次回全共への取組と畜産振興を図るには生産者と関係機関が統一目標を掲げ、さらなる連携強化と総力を結集した取組が不可欠。その取組が豊後牛の銘柄確立と農家所得向上に繋がると考察。

【はじめに】

管内は古くからの肉用牛繁殖地帯で、和牛の育種・改良が主体的かつ積極的に取り組まれてきた地域である。また、近年では大規模肥育経営体の新規参入も加わり、繁殖・肥育地域一貫生産体制が構築され、豊後牛の銘柄確立に向けた取り組みが、地域一丸となって推進されている。こうした中、和牛の育種・改良の成果を競う、第10回全国和牛能力共進会（以下第10回全共）が、平成24年10月に長崎県で開催され、当家畜保健衛生所（以下家保）は、地区指導班として出品対策に携わり、一定の成果を得るとともに、その成功裏にある地域畜産振興の現状と今後の課題について検討したので、概要を報告する。

【推進協議会の設立】

第10回全共で優秀な成績を収めることを目的に、平成21年6月に第10回全共大分県出品基本方針が策定された（表－1）。これを受け、当初管内では平成22年7月に管内の畜産関係機関で構成する第10回全共大分県西部地区推進協議会（以下県西推進協）を発足し（図－1）、県基本方針に準じた出品を行うことを確認し、以降の取組を行うことを決定した。

【指導班活動】

1. 指導班の主な活動内容と候補牛の選出方法

表－2、写真－1に県西地区指導班の主な活動内容を記した。

候補牛の拾い出しに不可欠な母牛等のデータは、JAが日ごろから繁殖雌牛を管理する母牛台帳システム（以下母牛台帳）を活用した。母牛台帳には飼養者や登録番号、登録点数、血統等の基本情報はもとより、育種価、系統雌（蔓牛）、直近の繁殖状況等が記載されており、出品要件に応じた抽出条件を設定することにより、速やかに抽出することができた。指導班では抽出された情報をもとに飼養者宅の巡回を重ね、必要に応じて会議を開催するとともに、集畜による管理や個別での指導を行った。

表-1 第10回全共大分県出品基本方針	
1. 出品区分について	全区出品を基本とする。
2. 出品区の方針	全区の出品牛は、県有種雄牛産子を基本とする。
1区	県の改良方針に基づき計画的に造成された種雄牛候補であり、県農林水産研指導センター畜産研究部に繁養する候補種雄牛とする。
2区	出品条件に合致したものの。
3区	出品条件に合致したものの。
4区	出品条件に合致したものの。
5区	出品条件に合致したものの。
6区	出品条件に合致したものの。ただし、出品牛は原則県有種雄牛の産子とするが、高等登録牛、娘牛、孫娘牛の何れか1頭が県外種雄牛の産子でも差し支えないものとする。
7区	種牛群：育種組合からの出品となるため、各育種組合が指定種雄牛1頭を指定し、その産子から出品条件に合致したものの。 肉牛群：肥育牛は県下からの産子とする。
8区	現場後代検定中及び現場後代検定予定のうち出品条件に合致する種雄牛から選定する。
9区	出品条件に合致する種雄牛の産子から選定する。

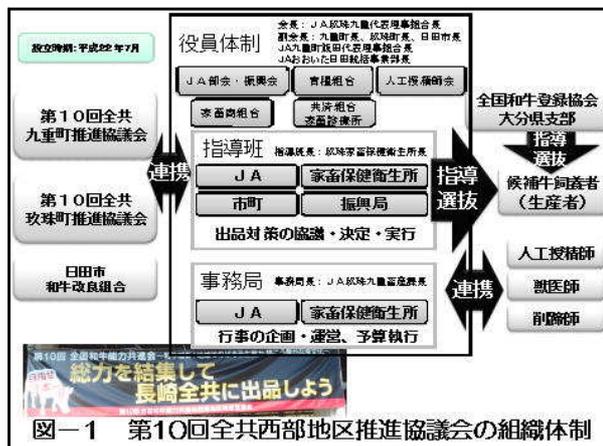


表-2 西部地区指導班で行った活動内容	
種牛の部	肉牛の部
・対象雌牛のリスト化	・交配対象雌牛のリスト化
・指導班での指導方針等の協議・確認	・指導班での計画交配の協議・確認
・巡回による定期的な管理指導（飼料給与、適度加減、栄養管理）	・人工授精師への交配推進
・体測調査（体高、十字部高、胸囲等）	・産子調査
・集合管理指導会の開催	・臨時市場上場牛の決定
・調教指導会の開催	・巡回による定期的な調査と管理指導
・地区予選会の開催	給餌・採食量の確認
・剖検師との連絡・調整	・体測調査（体重、体高、胸囲等）
・飼養管理支援（糞糞り、運動）	・血液検査（ビタミンA、一般生化学性状）
・毛刈等の手入れ	・超音波画像診断



2. 各出品区ごとの県最終予選会までの取組

(1) 種牛の部

種牛の部各区ごとに行った取組を表-3に示した。平成24年4月に登録審査が種牛性に重点をおいた審査標準が改正されたことを受け、種牛の部全区に共通して、その内容に準じた選抜を行うことを基本に、特に「品位」の中の肩付きの良し悪しとセットとしての揃いを重要視した選抜を行った（写真-2）。

①第4区（系統雌牛群）

系統雌牛は、玖珠郡を中心に第9回全共時に主要系統の13系統が整理され、母牛台帳に記載されるよう整備された。これをもとに、平成23年4月、揃いのよいセットが組めるよう現存頭数の多い3系統（たから系、ひさとみ系、しゆく系）から119頭のリストを作成した。同年6月から選抜巡回と協議を重ね、揃い等の面からたから系での出品を決定した。

その後、平成23年12月に全国和牛登録協会主催の「特色条項調査会」に合わせ、候補牛11頭を集畜し、たから系の美点・欠点を調査するとともに、選抜と集合管理指導を実

施。

平成24年5月の地区予選会では6頭の県最終予選会出品牛を選抜し、最終的には4頭の県代表牛出品が決定した。

②第5区（繁殖雌牛群）

繁殖雌牛群は、「藤平茂号」、「寿恵福号」、「隆茂38号」、「八重福栄号」の4頭の県有基幹種雄牛を父牛とする出品条件に応じた母牛を選抜対象とした。また、品位や揃いに加え、登録審査時の体高(135.0cm以下)と登録点数(82.0点以上)を選抜条件に付し、リストを作成した。これらの条件から平成22年9月に147頭のリストを作成し、同年10月から選抜巡回と協議を重ねた。平成23年12月に候補牛12頭を集畜し、選抜と集畜管理指導を実施。

その後、地区予選会で6頭の県最終予選会出品牛を選抜し、最終的には中央地区、豊肥地区からの候補を抑え、4頭の県代表牛出品が決定した。

③第6区（高等登録群）

高等登録群については、平成23年度大分県畜産共進会に出品し「グランドチャンピオン」を獲得した3頭を候補牛の柱に置き、取組を行ってた。その後、県最終予選会まで、他の候補牛の動きはなく、自動的に県代表牛として決定した。

④第7区（総合評価群）

総合評価群は、平成23年6月に母牛台帳で「勝福平」産子82頭をリストアップし、巡回と選抜を重ねた。途中、子牛市場に出荷され体型的に優れた産子は、JAが主体となり候補牛として管内保留に努めた。以降、体高等の発育状況を確認しながら、定期的に指導、選抜、協議を重ねた。平成23年11月には玖珠郡和牛育種組合主催の「現地検討会」に18頭の候補牛を引き出し、勝福平産子の美点、欠点を調査した。また、この区に限り、候補牛全てが育成牛であったことから、飼養者相互の技術錬磨を煽る目的で、飼養者を巡回に同行させ、互いに刺激となるよう配慮した。地区予選会で6頭の県最終予選会出品牛を選抜し、最終的には豊肥地区からの候補を抑え、4頭の県代表牛出品が決定した。

⑤第2・3区（若雌の区）

若雌の区については、平成24年4月に九重町、玖珠町、日田市の各予選会開催され、地区予選会で5頭の県最終予選会出品牛を決定したが、残念ながら県代表牛としての出品は成し得なかった。

取組内容	内訳	4区 (系統雌牛群)	5区 (繁殖雌牛群)	6区 (高等登録群)	7区 (総合評価群)	2・3区 (若雌の区)
候補リスト作成	時期	H23. 4月	H22. 9月	H23. 10月	H23. 6月	H24. 4月
	頭数	1 1 9 頭	1 4 7 頭	3 頭	8 2 頭	1 6 7 頭
選抜巡回	時期	H23. 6月～	H22. 10月～	—	H23. 7月	H24. 4月
	回数	1 0 回	6 回	—	1 1 回	1 回
集合での管理指導及び選抜	時期	H23. 12. 27	H23. 12. 27	—	H23. 11. 17	H24. 4. 24
	回数	1 回	1 回	—	1 回	1 回 (町予選会)
地区予選会	引出頭数	1 1 頭	1 2 頭	—	1 8 頭	2 8 頭
	開催日	H24. 5. 24	—	—	—	—
県最終予選会	引出頭数	6 頭	9 頭	3 頭	8 頭	1 2 頭
	開催日	H24. 8. 24	—	—	—	—
県代表頭数		4 頭	4 頭	3 頭	4 頭	1 頭 (2区補充)
備考	主要13系統から「たから」系統での出品 父牛、登録点数、登録審査時体高を考慮 H23年度大分県畜産共進会出品牛 生産者を交えた合同巡回を1回実施					

平成24年4月：黒毛和種審査標準の改正
→「種牛性に重点をおいた審査基準」

- 「品位」特に肩付きの良し悪しに重点
- 西部地区基礎牛の特色（体積、発育、体上線の強さ）を意識
- セット群としての揃い




地区予選会出品牛 (H24. 5. 24) 最終比較審査会 (第5区)

写真一 種牛の部候補牛の選抜にあたり注意した点

(2) 肉牛の部

肉牛の部各区ごとに行った取組を表-4に示した。子牛生産は県出品基本方針に基づき指導班で協議し、家畜人工授精師の協力を得て各区ごとに計画交配を推進した。

その後、分娩された産子を県指導班と共に定期巡回し、平成23年6月に開催された臨時市場に管内から21頭の産子を上場した。

臨時市場では管内の肥育農家が4戸が13頭を購入し肥育を開始。それに伴い体測、血中ビタミンA値の測定、超音波画像診断等の調査と採食状況等を加味した指導を行った。その結果、県代表牛として、管内から肉牛の部

第7区と第8区に2戸3頭が県代表として選抜された。

取組内容	内訳	7区	8区	9区	備考
		(総合評価群)	(若雄後代群)	(去勢肥育群)	
候補リスト作成 (計画交配用)	時期	H21.2月	←	←	
	頭数	174頭	46頭	126頭	
産子調査	時期	H23.1月	←	←	
	回数	H23.2月～	←	←	
巡回指導	回数	1回	←	←	
	開催日	H23.6.2	←	←	
臨時市場	上場頭数	14頭	3頭	4頭	玖珠家保管内
	管内肥育頭数	8頭	2頭	3頭	
巡回指導	開催時期	1回/3カ月	←	←	体測調査 血液検査 超音波画像診断
県代表選抜会議	開催日	H24.8.23	←	←	
県代表頭数		2頭	1頭		

3. 最終比較審査までの取組

県最終予選会以降の各区の取組を表-5に示した。種牛については、上位入賞を目指し、調教師を招いた集合での調教指導と栄養度管理を重点項目に据え飼料給与と引き運動等の加減等について随時指導を行った。また、出品者との信頼関係の構築と士気高揚をを目的に、1人の指導班員が2頭の候補牛を担当し、最終予選会までの間、運動や皮膚被毛を和らげるための藁拘り等の飼養管理を支援する体制を整えた。

一方、肉牛部については、ストレスの負荷を避けるため、巡回は必要最小限に控え、最後まで事故のないよう注意喚起に徹した。

図-2に種牛の部出品牛の栄養度管理事例の一例を示した。指導班の中には飼養管理の支援が初めて班員もいたことから、取組開始にあたり指導班員を対象とした講習会を事前に開催した。また、栄養度判定は巡回ごとに随時行い、その記録をもとに飼料給与量と運動の加減を指導するよう徹した。

その結果、県最終予選会以降、栄養度過多に陥った牛や地区予選会時に栄養過多に陥った牛が、栄養度6.4以内に収まった。

種牛の部					
項目	区分・頻度				備考
	4区	5区	6区	7区	
巡回指導	4頭/set	4頭/set	3頭/set	4頭/set	栄養度重視
集合管理指導	3回/月	3回/月	1回/月	3回/月	調教指導含む
個別支援	2回	2回	0回	2回	調教指導含む
	5日/週	5日/週	不定期	5日/週	引き運動、薬すり

肉牛の部	
・	ストレス負荷を避けるため、必要最小限の巡回を慣行
・	事故の内容、注意喚起

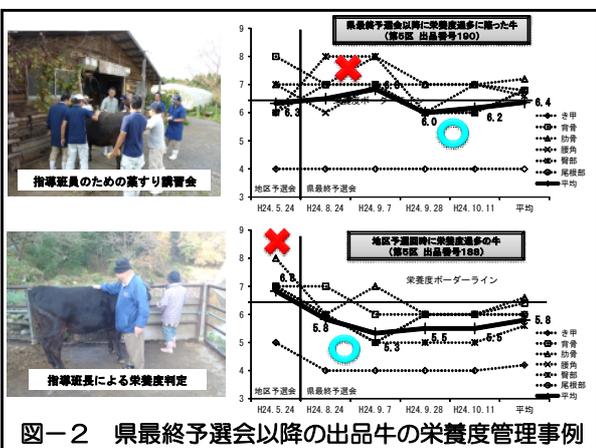


図-2 県最終予選会以降の出品牛の栄養度管理事例

【最終比較審査での成績】

表-6 に長崎会場最終比較審査での大分県勢の成績を、写真-3 に県西地区からの代表牛の成績を示した。県西地区からの出品牛は繁殖雌牛群で優等賞首席を筆頭に、系統雌牛群で優等賞2席、総合評価群で優等賞4席、高等登録群で優等賞6席を獲得するなど、これまでにない快挙を達成し、また、他の県代表牛も健闘し、若雄の区でも優等賞首席を獲得するなど、大分県勢は総合第3位という輝かしい功績を修めた。

出品区	出品番号	名号	出品者	成績
第1区(若雄)	19	光星	畜産研究所	優等1席
第2区(若雄の1)	44	もりうめ	森田 孝子	優等9席
第3区(若雄の2)	56	よしなぐ	立憲 真次	優等4席
第4区(系統雌牛群)	127	まつはるみ1	小野 忠造	優等2席
	128	まつよしの1	中原 賢一	
	129	まつよしの3	魚返 博明	
	130	まつしげ6	梅木 隆富	
第5区(繁殖雌牛群)	187	はな	森 信幸	優等1席 種牛性賞
	188	まきはる2	高橋 英雄	
	189	まつふく2	河島広太郎	
	190	ふくひさ	有) グリーンストック八幡	
第6区(高等登録群)	239	まつふじ	衛藤 昇	優等6席
	240	まつふじ3の1		
第7区(総合評価群)	294	たかさくら3	宿利 美治	総合第3位!
	295	よしひら	佐藤 美知雄	
	296	もりこ	相良 謙二	
	297	ひさとみ13	赤峰 稔彬	
種牛	40	富士野21	南ファゼンダ・グランデ	優等4席
	41	勝清	森 利博	
肉牛	42	楠大知	浦田 学	1等賞
	64	私舟	南ファゼンダ・グランデ	
第8区(若雄後代検定牛群)	65	千代乃富士	尾道 一太	1等賞
	66	実穂元義	浦田 学	
第9区(去勢肥育牛)	106	鶴2710	阿部 登	優等21席
	107	鶴706	狩生 正治	1等賞

種牛の部

第5区: 優等賞首席
第4区: 優等賞2席
第7区: 優等賞4席
第6区: 優等賞6席

肉牛の部

第7区: 優等賞4席
第8区: 1等賞

出品番号	と畜率 (%)	筋肉率 (%)	ロース (%)	バラ (%)	皮下脂肪 (%)	筋間脂肪 (%)	多量 (%)	目MS (%)	肉質等級	MUFA (%)	
40	79.0	479.8	64	8.8	2.3	6.9	74.2	8	A	5	58.5
41	89.0	461.6	67	7.3	3.3	6.2	73.1	7	A	4	52.7
64	64.3	411.3	80	7.8	2.2	6.5	75.1	6	A	4	53.1

写真-3 西部地区出品牛の最終比較審査会での成績

【第10回全共の取組の検証】

第10回全共は、輝かしい成績を収め 盛会のうちに終えたが、次回全共に向けた取組の一助とするため、第10回全共の成功要因を検証した。検証方法は出品者並びに管内の家畜人工授精師を含む生産者に対し、その取組内容や指導内容、成果から今後期待する点などをアンケートにより調査した。

(1) 種牛の部出品者の検証結果

種牛の部の出品者の検証結果を図-3 に示した。指導班活動に対しては、9割以上が適切と回答した。出品対策で最も苦労した点は栄養度管理が最多であった。第10回全共では優等賞首席候補と目されるも、栄養度判定で惜しくも後退した出品区もあり、今後の指導においては今回以上に、栄養度を重視する必要性が強く示唆された。

成果については、8割以上の出品者が満足と回答し、その成果として「地域の結束力」と、「これまで地域で取り組んできた育種・改良」と全員が認めていることが判明した。

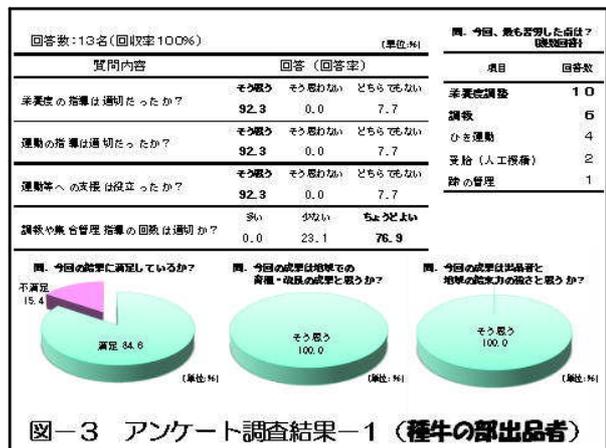


図-3 アンケート調査結果-1 (種牛の部出品者)

(2) 肉牛の部出品者の検証結果

肉牛の部の出品者の検証結果を図-4に示した。指導班活動については、概ね満足するとした回答が得られたが、飼料給餌や増体に対する具体的な指導が不足するといった回答も寄せられ、出品者が最も苦慮した点と合わせ、我々指導班の技術錬磨がこれまで以上に必要であることが浮き彫りとなった。成果については、種牛の部出品者とは対照的に2名ともに「不満足」と回答し、ある意味では心強い回答結果であった。



(3) 出品者以外の生産者等

出品者以外の生産者や家畜人工授精師が全共や品評会に対する検証結果を図-5に示した。全共をはじめとする品評会への関心については、「興味がある」と回答したものは、約7割であった。また、3割以上の者は「種牛性」を競う会より、「枝肉成績」を競う会の方に関心が高いことも判明した。

全共の成果については、出品者と同様に「結束力の強さ」と認めるものの、「育種・改良の成果」と認めるものは8割弱に止まり、一部の生産者には、全共と育種・改良との接点が十分反映されていない状況にあるものと推測された。

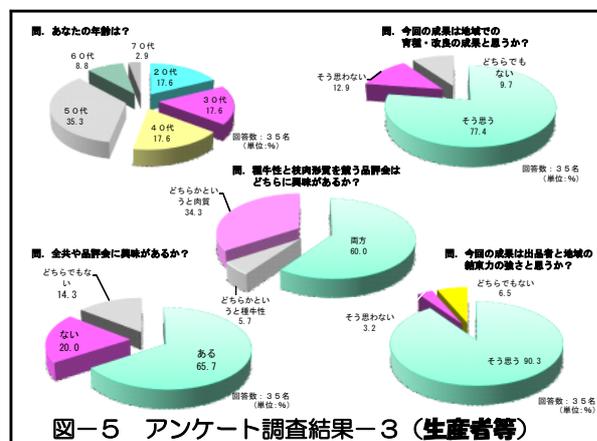


表-7 アンケート調査結果-4

問. 今回の成果をどう活かしたいか (活かすべきか)?
(複数回答)

項目	出品者		生産者 (回答者数:35)
	種牛の部 (回答者数:13)	肉牛の部 (回答者数:2)	
子牛市場価格	11	2	26
ブランド化	11	2	16
飼養管理技術	7	1	12
地域の活性化	6	1	10
後継者の確保	4	1	6

(4) 第10回全共の成果から期待するもの

出品者と出品者以外の生産者等が、今回の全共の成果から期待するものを表-7に示した。出品者、生産者等ともに多くの回答者が、子牛市場価格と豊後牛のブランド化に結びつけたいと考えていることが判明した。

【まとめ及び考察】

第10回全共の出品にあたり、生産者と関係者が一体となることを目標に大分県西部地区推進協議会を設立した。当家保は指導班の一員として、候補牛の選抜と管理指導を中心に、

関係機関との連携を図り推進協の運営にも積極的に関与した。その結果、出品者と指導班が一丸となり、第10回全共で大分県代表として管内から18頭の代表牛を出品した。最終比較審査では、繁殖雌牛群の優等賞首席を筆頭に各群で優秀な成績を修め、県勢総合第3位の栄冠獲得に大きく貢献し、その目的は概ね達成できたものとする。

今回の成果は、県代表となった出品者の1人1人がその重責を担い、熱意と努力を注いだ結果であることはもちろんであるが、古くから肉用牛の育種・改良事業への関心が高く、その取組が地域一体となって生産者とともに積極的に行われてきたことが大きいと考える。このことは、終了後に行った検証結果にも反映されていた。

また、もう一つの要因に「地域の結束力」が上げられ、それを推進し支える関係機関の職員（指導班員）が毎月1回定例会議を開催し、畜産に関する様々な情報を共有し、協議する場の存在が大きいと考える。加えて、管内の家畜人工授精師も畜産担当者の定例会と時を同じくして、定例会議を開催し、関係者が情報を共有し、取組の方向性や目標を理解し、それぞれの立場で努力し、取組が展開されていることを考察する。

しかしながら、現在の肉用牛の飼養状況を考慮すると、頭数の減少を筆頭に次回全共への取組に多くの不安要素や課題が存在することが垣間見られる。こうした要素の中には、現在の子牛市場価格が「種牛性」より「枝肉成績」を重視するあまり、特定種雄牛精液の供用に偏る傾向が見られる点もその一つであり、そのことは、生産者等に対する検証の中からも伺えた。

こうしたことから、第11回全共に向けた取組と地域の肉用牛振興を図るためには、現在管内で増加傾向にある肥育基盤を積極的に活用し、これまで培ってきた結束力と育種・改良の成果を再度、生産者等に改めて周知することが重要であるとする。加えて、次回全共で優秀な成績を修めるためには、現在の指導体制を維持するとともに、関係者と生産者の連携をこれまで以上に強くする必要があるとする。また、種牛の部においては、地区段階の品評会から栄養度を重視した審査を行い生産者にその必要性を周知するとともに、肉牛においては、枝肉成績の向上に向けた取組を喫緊の課題と捉え邁進するとともに、我々指導者のスルアップが必要とする。そして、こうしたこと以上に生産者と関係者が「子牛市場価格の向上と地域の活性化」という目標を共有し、その目標達成に向け、それぞれの立場で最大限努力することが、今後の「おおいた豊後牛」の評価を高め、延いては農家所得の向上と生産振興に繋げる上で、重要とする。

